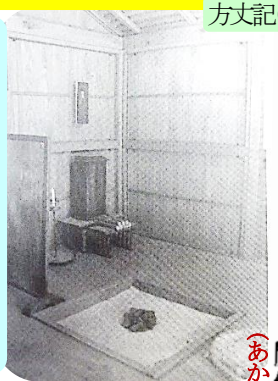
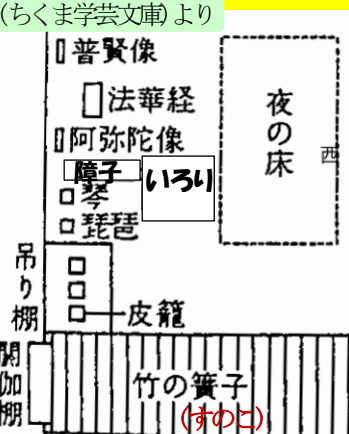


これからのことを…4の(4)

●方丈記かぶりの(4)



方丈記(ちくま学芸文庫)より



と。どこかに根本原因があるとしても、結局そのしんどさを生きていかなければならないのは個人個人だからなのでしょう。飢餓の時の「いとあはれなること事も侍りき」の描写からもそのことが感じられます。それが長明さんらしさのかなあと勝手に推測します。

長明さんらしさのかけ

前々回に書いた五大災厄はこの世の末か地獄かと言われるくらいの出来事でしたが、長明はそれを「世の中は住みにくく、我が身と栖は、はかなくむなし」との文言で結ぶ。確かに、火事や竜巻や地震は自然のなせることですが、遷都の時には『伝へ聞く、いにしへの賢き御世には、あはれみをもって、国を治め給ふ』と書いた長明は、大飢饉に至ったのは天候だけのせいではないとわかっているはず(背景には源平の争乱等が)。しかも都は米や野菜の生産を地方に頼っているとも長明は言う。800年前も今も変わらない。色々感じる所があると思うのに、この状態を「人と住居」の問題に持って行ったのは何故か

長明は54歳で洛北大原より洛南日野に。そこで20歳代から30歳初めに自身が目にした5大災厄から書き始め、『すべて、あらぬ世を念じつつ、心を悩ませる事、三十余年なり。その間、折々のたがひぬ、おのづから、短き運をさとりぬ』と、この世と上手にいかないことで心悩ませ、50歳で大原に遁世したことをも。三十余年とは父が長明18歳の時に亡くなったからの年数と考えられる。次には、移り住んだ日野の草庵



河合神社方丈庵復元より

とそこでの生活を長明が今までとは違い、とても楽しんでいるし、愛している。今回はその辺りをちゃんと伝えられたらと思っています。**移り住んだ日野** 親鸞の生誕地である伏見区日野にある法界寺から1km山中に



伏見区日野の法界寺

入ったところ、『ここに、六十の露消えがたに及びて、さらに、末葉の宿りをむすべる事あり。いよいよ、旅人の一夜の宿をつくり、老いたる蚕の繭をいとむがごとし』(訳・さて、ここに六十歳という露の消え時に及んで、さらにまた、葉先にむすぶ露のごとく、はかぬ住居をもうけることにいたった。いよいよ、旅人が一夜の宿をつくり、年老いた蚕が繭をせせと作るようなものである)。この後、以前住んだ住居と比べ何回も小さいものか、年齢は高くなるが、住居は段々狭くなってゆく、と続きます。

方丈庵とは

『その家のありさま、世の常にも似ず。広さはわづかに方丈、高さは七尺がうちなり』広さがわずか4畳半、高さは2mの家を自分で土台を組み、簡単な屋根を葺いて、木の継目ごとにかげがねをかけた。場所が気に入らなければ、いつでも分解して牛車2台でどこへでも移動できるように、誰の所有地かが問われる今では考えられないことですが、もしかすると大原を出て、それまでにも京の内々に庵を作ってきたのかもしれませんが。

左上の図のように、草庵東に90cmのひさしを作り、かまどもある。南に竹の簀子を敷き、その西に開加棚(神仏に水をお供えする所)を。

庵内部を三つに分けて阿弥陀の絵像、普賢菩薩の掛け物、前には法華経を。草庵東の端には「わらびのほとろ」の寝床。障子を隔てて折琴と継琵琶(どちらも長明作製かと)を、その横に竹の吊り棚に和歌、音楽、仏教の書巻を。

庵の外では

南に懸樋からの水をためる所を岩で作る、山中だから薪は沢山ある。この音羽山には、まさきのかずらが生い茂っているが、西の方角は見通しがよく、西方にあると言われている極楽浄土を観想する便宜がないわけではない、と。

『春は藤波を見る。彩雲のごとくして、西方にほふふ』、春は藤の花が一面に咲いて紫の雲のようで西方に美しく映え、夏のホトトギスの声は死出の山路の案内をしてくれることを、秋ひぐらしの声は、はかぬ運命の悲歌であるよう。冬は雪、積もり、そして消えゆく様子は人間の罪障にもたとえることが出来る、人間の罪悪も降り積もる雪によって仏様が清めてゆくように思える、と書く。



草庵での生活

長明はこの山中での生活がとても気に入っていた。『もし、念仏もの憂く、読経まめならぬ時は、みづから休み、みづからおこたる。』それを妨げる人もいないし、恥ずかしく思う人もいないから。今はない巨椋池(1941年干拓完了)に行きかう船をながめて満沙弥(まんしゃみ 7、8世紀歌人、「世の中を何にたとへん朝ぼらけ漕ぎ行く舟の後の白波」)の風情をまねたり、流れる水の音や松風の響きに琵琶を奏でたり。

自由に伸び伸びと

長明は住居の図面を書き、家を組み立てるだけではなく、折りたたみの琴や継琵琶まで作ったようです。音楽や和歌にも秀でて、庵の内外にそれを楽しむ場がある。山中なので音をたてても何も気にすることがない。狭いけれど、長明にとっては至福の小世界(解説浅見さん)だったと。ふもとに住む山守の所に十歳の少年がいて、時々裏面右下へ続きます

八幡まるごと館だより

2020年10月6日/131号

<発行>八幡まるごと館/八幡市男山松里12-20 (TEL&FAX) 075-983-3664(9時~17時)

(E-MAIL) yawata@marugotokan.net

ホームページは <http://marugotokan.net/>

又は、八幡まるごと館で検索して下さい



八幡まるごと館は街行く人のだれもが自由に立ち寄れる“地域サロン”です。休館日は毎週火曜日全日と土・日午後です。

＜9月にこんなことをしました＞

絵手紙講習会



9日 森本玲子に教えていただいています。少しずつ参加者が戻って来られていますが、お家を出づらくなった方もいらっしゃるようです。この日は花オクラや唐辛子等を見て描きました。初めの



頃のことを思うと色の使い方等少しは上達してきたかなあと。ミニギャラリーでの展示を



又予定していますので、作品をためておいてください。

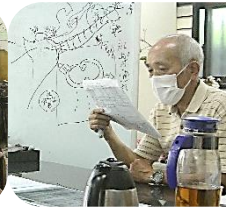
オカリナひまわ



さんオカリナを持って来られて、前半のため息がでるほど何曲も吹き、休憩時間で話に花を咲かせてから後半にうつります。同じことをもうずっと繰り返しています。中々合わなかった所がこういう練習で改善してくるんです。不思議ですが、各自で練習して身につけたものです。この日の休み時間コンチリと。皆さんも笑顔です

28日(毎週月曜日) 全員は揃いませんし、今の所コンサートで発表の予定もたちませんが、皆

八幡の歴史 24



本間の渡し盛んで、山崎からは八幡宮への燈油が運ばれたり、八幡宮参詣に来る人々で橋本の町は賑わった。この日出口さんは「石清水八幡宮燈油通路橋本渡舟の事」という1438年8月15日付の將軍からの古文書を。勝手に渡し場を作らない等記載されていた。燈油の渡しを支配した橋本の伴家こ現存。

24日 出口修さんは中世の八幡で淀川の関所、橋本の渡し等のお話を。橋本山崎間には725年行基が橋をかけ、850年大水で壊れ、豊臣秀吉により再建されたけれど…。橋が出来以前より山崎橋

理科の実験 34



25日 8月実施出来なくてこの日に。木下章司さんと宮地さんが来て下さって、初めに樹氷、霧水もどきを目の前で体験しました。フェルトを樹の形に切

って①針金やナット、容器を使い、ジクロロメタン(冷却スプレー等で使用)をその容器に入れ、うちわであおぐと薬品がフェルトに浸み込み、その内樹氷が②(写真)。これは薬品が蒸発して気化する時に周りから熱を奪うため



折り紙教室



30日 出口宏子さんはこの日法隆寺文殊菩薩の切り絵を用意して下



さっていて、前回に比べ細かい作業でしたが、全員が完成出来ました。出来上がりは組み立てて坐像になりました。普段



使わない筋肉を使い痛くなっている方もおられるかも。宏子さんが色々工夫されて、この教室後お家で続きをされる方の材料を提供して下さっています。



八幡まるごと館 10月・11月の予定 休館 10月25日(日)

＜パソコン教室＞ 毎週月曜日 10時～12時です
10月5日(月)10時～12時 参加費 300円(コーヒーつき) 10月12日、19日、26日パソコンを持って来て下さい。講師の吉田さんはお休みされます。

＜オカリナクラブ ひまわり＞ 楽しめる時に
10月5日(月)13時～ 参加費100円 残り10月は12日、19日、26日です。

＜絵手紙講習会＞
10月14日(水)13時30分～ 講師 森本玲子さん参加費 400円(コーヒーつき)
次回は11月11日(水)です

＜折り紙教室 第14回＞ 運鶴 どうぞお楽しみに。
10月16日(金)13時30分～ 講師 出口宏子さん 参加費材料代は100円
持ち物 ハサミをお忘れなく

＜歴史を学ぶ 新八幡の歴史 N023＞
10月22日(木)13時30分～ 講師出口修さん 参加費100円 月1回です

＜楽しい理科の実験 N035＞ フラパンで蝶々を作ります 色鉛筆・ハサミ・消しゴム
10月23日(金)13時30分～ 講師木下章司さん 参加費300円(コーヒーつき)

＜パッチワーク ポーチ＞ 持ち物 ハサミ、糸、鉛筆、針
10月29日(木)13時30分～講師 西角千代子さん 費用 材料費込みで800円
次回は11月5日(木) 2回で完成する予定です。8人定員の所既に定員になりました。

空気が冷え(気化熱)、水蒸気が凍る。アイスクリームは牛乳、生乳、卵、砂糖、抹茶やキャラメル等を加え③混ぜる。そこに粉々にしたドライアイス④を入れ、よく混ぜる。これを何回も。とても美味しいアイスクリーム⑤が出来ました。今まで3回作った中で一番かな。準備物等ありがとうございました。

＜あんなこと・こんなこと＞

* 秋のまるごと市の問い合わせが数件ありましたが、一応来年の餅つきくらいまでの大きな取組は中止と考えています。宜しくお願ひ致します。

* ずぶの素人が方丈記だけで、恥ずかしげもなくよく書いてきたことだと思います。お読みいただきありがとうございました。方丈記はあと1回です。(うえたに

続きです) 方丈庵にやって来る。六十歳の長明と出かけて、茅花、岩梨、芹、零余子(むかご)をとり、落穂で神事で使う茅の輪のようなものを作ったりする。大人との付き合いは苦手だった長明さんも孫のような少年と打ち解けて楽しそうである。方丈記には草庵の内外を本当に事細かく書いてあって、そのことがわよくかります。独り者でも長明さんのようには中々過ごせませんが、音を奏でるというのは少しわかります。筆者はまるごと館のオカリナクラブの一員ですが、気分を変えて、一人の時吹くのもいいものです。ところで六十歳とはまるごと館では若者ですが、現在では何歳に相当しますか？